花園のコウヤマキ

希望のサクラ

棚倉の偉人

棚倉の歴代藩主一覧

大　名	藩　主	在　任　期　間	事　　項
立　花　家	立花　宗茂	慶長11年(1606)～元和 6 年(1620)	筑後柳河藩に転封
丹　羽　家	丹羽　長重	元和 8 年(1622)～寛永 4 年(1627)	陸奥白河藩に転封
内　藤　家	内藤　信照	寛永 4 年(1627)～寛文 5 年(1665)	
	内藤　信良	寛文 5 年(1665)～延宝 2 年(1674)	
	内藤　弌信	延宝 2 年(1674)～宝永 2 年(1705)	駿河田中藩に転封
太　田　家	太田　資晴	宝永 2 年(1705)～享保13年(1728)	上野館林藩に転封
越智松平家	松平　武元	享保13年(1728)～延享 3 年(1746)	上野館林藩に転封
小 笠 原 家	小笠原長恭	延享 3 年(1746)～安永 5 年(1776)	
	小笠原長堯	安永 5 年(1776)～文化 9 年(1812)	
	小笠原長昌	文化 9 年(1812)～文化14年(1817)	肥前唐津藩に転封
井　上　家	井上　正甫	文化14年(1817)～文政 3 年(1820)	
	井上　正春	文政 3 年(1820)～天保 7 年(1836)	上野館林藩に転封
松井松平家	松平　康爵	天保 7 年(1836)～嘉永 7 年(1854)	
	松平　康圭	嘉永 7 年(1854)～文久 2 年(1862)	
	松平　康泰	文久 2 年(1862)～元治元年(1864)	
	松平　康英	元治元年(1864)～慶応 2 年(1866)	武蔵川越藩に転封
阿　部　家	阿部　正静	慶応2年(1866)～慶応4(明治元)年(1868)	
	阿部　正功	慶応4(明治元)年(1868)～明治4年(1871)	廃藩置県

歴代の棚倉城主　※（　）内は城主を務めた期間

1　初代城主 丹羽五郎左衛門長重（1622～1627）

丹羽長重は棚倉城をはじめ、白河小峰城といった数々のお城を手掛けた大名です。

長重は元亀２年（1571）に美濃国（岐阜県）に生まれました。丹羽家は有力な戦国大名であり、父である長秀は織田信長や豊臣秀吉に仕えました。特に秀吉は長秀を慕い、信長の家臣であった際に名乗った姓「羽柴」の羽の字は、丹羽の羽の字から取ったほどと言われています。

天正13年（1585）、長秀の死によって丹羽家を継いだ長重は秀吉の家臣として働いたものの、度重なる失態で次第に不仲となり、領地を削られて加賀国小松（石川県）に移されました。関ヶ原の戦いでは豊臣方に味方したため、徳川家康により領地を没収されてしまいますが、のちに息子の秀忠に許され、慶長８年（1603）に常陸国古渡（茨城県）にて１万石の大名に復活しました。豊臣家が滅んだ大坂の陣での働きにより家康にも認められ領地を増やし、元和８年（1622）に棚倉５万石へと移ってきました。

寛永元年（1624）に棚倉城築城を開始した長重でしたが３年後、それまで隣国白河も治めていた会津の蒲生家廃絶のあとを引き継いで白河へ移りました。城はまだ完成しておらず、次の城主内藤信照に工事が引き継がれました。

2　２代城主 内藤豊前守信照（1627～1665）

寛永４年（1627）、棚倉から隣の白河へと移った丹羽長重に代わり、新しく近江国（滋賀県）から内藤信照がやって来ました。

内藤家は、戦国時代から三河国（愛知県）にて徳川家に仕えてきた、いわゆる譜代大名です。ところで、関ヶ原の戦いより以前から忠義を尽くしていた内藤家が棚倉に移ってきたのは理由がありました。徳川家は、仙台藩の伊達家という強大な大名家に謀反を起こさせないよう、昔から付き従ってきた家来を東北の玄関口にあたる地域に配置し、にらみを利かせたのです。

さて、信照がまず最初に取り組まなければならない仕事は、前城主がやり残した棚倉城を完成させること、そして城下町の整備でした。また、棚倉藩政を支える政策も数多く実施しています。例えば、財政の確保のために領内の田畑の収穫量を調査して税を決め、久慈川の水運交通の整備、さらには生活用水確保のために玉野堰の管理を徹底するといった生活インフラに至るまでこの時期に多くが確立しました。

信照は信仰にも厚く、神社や寺に対して積極的な保護をしました。例えば、蓮家寺（別項参照）に銅鐘を寄進したり、境内に新しく堂を建立したりするなどしています。さらに、信照自身も赤館の麓に光徳寺（こうとくじ）を建立し、紫衣事件（しえじけん）（別項参照）によって配流された玉室宗珀（ぎょくしつそうはく）を手厚くもてなしました。

このように棚倉藩の基礎固めを担った信照は、寛文５年（1665）に74歳でこの世を去りました。

3　3代城主 内藤豊前守信良（ないとうぶぜんのかみのぶよし）（1665～1674）

信照死後、息子である信良が跡を継いで棚倉城主となりました。

彼の代は、困難の一言に尽きます。藩の財政は早くも苦しく、領内の農民も度重なる課税によって疲弊していました。そしてさらにそれに追討ちをかけたのが、棚倉城下を焼き尽くした寛文（かんぶん）の大火（たいか）でした。

記録によると寛文12年（1672）正月、新町から出た火は強風に煽（あお）られて瞬く間に広がり、信良自ら消火の指揮にあたったものの空しく、城下の武家屋敷136戸や民家312戸、蓮家寺も焼けてしまったとあります。復興再建には莫大な費用がかかったことは間違いなく、より一層苦しい財政となってしまったに違いありません。

延宝（えんぽう）２年（1674）に藩政から退いた信良は、元禄（げんろく）８年（1695）に71年の生涯を終えました。

4　4代城主 内藤豊前守弐信（ないとうぶぜんのかみかずのぶ）（1674～1705）

信良の後を継いだのは、養子で信良のはとこにあたる弐信です。領内では農作物の不作や飢饉が相次いでおり、救済のためのお金を出すなど藩の財政は相変わ

らず苦しくなる一方でした。解決の手だてを打てない弌信を見兼ねた江戸幕府は、改革のスペシャリストとして松波勘十郎（別項参照）を棚倉に送り込んできました。

弌信は勘十郎に作改奉行という役職を与え、早速財政改革にあたらせました。彼の施策は端的に言うと、増税に加えて農民の人びとの生活に極端な倹約を求めたものでした。それは村々の祭りといった生活行事まで無駄として切り捨てるような厳しさで、次第に勘十郎に対する不満や反発を集め、結局改革は失敗に終わってしまいました。

また一方で、内藤家の先代と同様に弌信もまた信仰が厚かったといいます。現在残る宇迦神社の本殿は、元禄14年（1701）に弌信が造営しました。

宝永２年（1705）、駿河国田中藩（静岡県）へと移ることが決まり、内藤家３代に渡る棚倉藩政は終わりました。

5　5代城主 太田備中守資晴（1705～1728）

宝永２年（1705）駿河国田中藩から内藤弌信と入れ替わるように棚倉城主となったのが太田資晴でした。

太田家は、江戸城を築城した太田道灌などを輩出した一族の系譜ともいわれていますが、詳細は定かではありません。父である資直は、幕府５代将軍綱吉の世話係である近習を務めるほどの信頼を得た人物でした。

資晴が造った寺が、花園地区にある長久寺です。宝永４年（1707）に建てられたこの寺に対して尽力を惜しまず、棚倉城の南門を寄進、移して山門とするほどでした。

江戸幕府においても要職を歴任した資晴は、享保13年（1728）に上野国館林藩（群馬県）へと移りました。

6　6代城主 松平右近将監武元（1728～1746）

享保13年（1728）、太田資晴と入れ替わるように上野国館林藩から移ってきた武元は16歳の若さで棚倉城主となります。

武元を輩出した松平家は、越智松平家と呼ばれる江戸幕府６代将軍徳川家宣の

弟の松平清武から成立した家で、大名の中でも御三家（徳川姓を名乗ることが許された尾張・紀伊・水戸）に次ぐ親藩の格を持った、将軍家に近い家柄でした。ちなみに、のちに棚倉城主を務める松平家とは別の系譜です。

元文４年（1739）、棚倉藩が治めていた領地２万５千石、55か村が、江戸幕府将軍の直接支配地である天領に組み込まれました。代わりに幕府から与えられた土地は遠方に位置していたため、棚倉藩は経営のために人を派遣しなければならず大きな負担となったようです。

城主を務める傍ら、武元は幕府においても要職を務めました。元文４年（1739）には、大名の出世の登竜門とされる奏者番（江戸幕府において大名・旗本が将軍に謁見する際、取り次ぎをする役職）を務め、５年後には全国の寺院や神社を管轄する寺社奉行を兼任しました。延享３年（1746）に再び館林に移り、のちに江戸幕府の最高職である老中を務めました。

7　７代城主 小笠原佐渡守長恭（1746～1776）

延享３年（1746）、遠江国掛川藩（静岡県）より移ってきた長恭は、わずか７歳で棚倉城主となりました。

小笠原家の遠い祖先は甲斐国（山梨県）や信濃国（長野県）を拠点とした一族で、初代忠知は徳川秀忠や家光に仕え、豊後国杵築藩（大分県）を創始しました。その後も三河国吉田藩（愛知県）や武蔵国岩槻藩（埼玉県）などを経て着々と石高を伸ばしていきました。棚倉では、３代71年間にわたり城主となり、これは内藤家に次ぐ長さです。

寛延２年（1749）、前城主の代に天領となっていた塙にて、戸塚騒動と呼ばれる大規模な一揆が起こりました。この出来事の鎮圧のため、長恭も60人ほどの兵隊を天領支配の拠点である代官所へ配下を派遣しています。

安永５年（1776）、37歳で亡くなりました。

8　８代城主 小笠原佐渡守長堯（1776～1812）

父長恭の死によって、安永５年（1776）に息子である長堯が17歳の若さで棚倉城主を継ぎました。

天明4年（1784）、6代棚倉城主松平武元の代に天領となった塙の領地の内17か村が、棚倉藩の支配へと戻されました。また、寛政10年（1798）には、近隣で起こった大規模な農民一揆である浅川騒動を抑えるため、白河や三春と共に棚倉より援軍を出しました。

また長堯の代には、小笠原騒動という政治スキャンダルが起こったとされています（別項「小笠原栄七郎の墓」参照）。長堯の弟である栄七郎が、長堯を失脚させて家督相続を目論んだものでしたが失敗に終わり関係者の多くが処罰されたという事件です。

また、天明の大飢饉では、ほとんど被害を出さなかったとされます。その手腕を認められて、寛政2年（1790）に奏者番に任ぜられて、白河城主の松平定信が行った寛政の改革にも参与しました。

文化9年（1812）に息子の長昌に城主の座を譲り、同じ年に49歳で亡くなりました。

9　9代城主 小笠原主殿頭長昌（1812～1817）

文化9年（1812）に父長堯の後を継ぎ、棚倉城主となりました。

翌年の文化10年（1813）、紅葉山火之番の役を江戸幕府より任されます。紅葉山とは江戸城の西丸にある、幕府歴代将軍を祀る廟が置かれた場所で、家康の命日には紅葉山御社参とよばれる公式行事が行われた神聖な場所でした。その場所の火之番とは、すなわち警備や防災を担う役職です。

文化14年（1817）、肥前国唐津藩（佐賀県）に移り、小笠原家3代にわたる棚倉支配は終わりました。

10　10代城主 井上河内守正甫（1817～1820）

文化14年（1817）、遠江国浜松藩（静岡県）の井上正甫が新しい棚倉城主となりました。

井上家はもともと信濃国を本拠地としていた一族で、初代正就の母が徳川秀忠の乳母を務めた関係から取り立てられ、次第に幕府の中核を担っていきました。棚倉藩の前は、常陸国笠間藩（茨城県）や陸奥国磐城平藩（福島県）などを歴任

しています。

正甫は大変スキャンダラスな人物として伝えられています。棚倉に移って来た理由というのも、酒が入った勢いで農家の女性を手籠めにしようとしたという醜聞が幕府に知れ、その処罰としての意味が強いものでした。

正甫は浜松から棚倉への国替えについて大いに不満を持ち、結局死ぬまで棚倉の地を訪れることはありませんでした。その嫌いさは相当なもので、棚倉はどこもかしこも蛇だらけで、城の米が喰い尽されてしまう、また寝ている時でさえも棒で追い払わなければならないほどだという根も葉もない噂を幕府へ申し立てているほどです。

文政（ぶんせい）3年（1820）、早々に息子の正春に家督を譲った正甫は隠居生活に入ってしまいました。

11　11代城主 井上河内守正春（いのうえかわちのかみまさはる）（1820〜1836）

文政（ぶんせい）3年（1820）に15歳で棚倉城主となりました。一度も棚倉に足を踏み入れることのなかった父正甫とは違い、正春は棚倉藩主を務めて以降、メキメキ頭角を現していきます。

天保（てんぽう）5年（1834）には、大名の出世の登竜門とされる奏者番（そうじゃばん）や寺社奉行（じしゃぶぎょう）を兼任しました。天保7年（1836）、上野国館林藩（こうずけのくにたてばやしはん）（群馬県）へと移りました。

余談ですがこの後、館林藩へと移った正春は天保11年（1840）には幕府最高職である老中にまで上り詰め、その5年後にはかつて父正甫が治めていた遠江国浜松藩（とおとうみのくにはままつはん）（静岡県）に戻って来ることになります。

12　12代城主 松平周防守康爵（まつだいらすおうのかみやすたか）（1836〜1854）

井上正春に代わり、天保（てんぽう）7年（1836）に石見国浜田藩（いわみのくにはまだはん）（島根県）より松平康爵が新しい棚倉城主となりました。

松平家は6代城主松平武元と同じく親藩の家柄で、長く西国の外様大名に対するおさえとして機能した家でした。しかし父の康任（やすとう）は、老中在任中の同6年12月、但馬国出石藩（たじまのくにいずしはん）（兵庫県豊岡市）のお家騒動（仙石騒動）に関係した罪で隠居・慎みの処分を受け、翌年3月、康爵に棚倉への移封が命じられました。城引渡しの

準備中の６月に発覚した密貿易に藩が関わっていたため、こちらの方を転封の理由としているものもあります。

康爵の代に、南町地区の大部屋稲荷が造立されました（別項「大部屋稲荷神社」参照）。また、北山本地区の山本不動尊には、康爵により寄進された開運祈願の石灯籠が今も残っています。

嘉永７年（1854）、養子である康圭に城主の座を譲って退きました。

13　13代城主 松平周防守康圭（1854～1862）

嘉永７年（1854）に兄の康爵の養子となり、城主となりました。

康圭の代に起こった一大事として、安政の大地震が起こりました。これは安政２年（1855）に江戸を襲ったM6.9の大地震で、8000人を超える死傷者を出したといわれています。この地震で、松平家の江戸屋敷も甚大な被害を受け、康圭は棚倉から職人を派遣して修理にあたらせました。

また幕府における役職をみてみると、江戸城の大手門や桜田門の門番や、文久元年（1861）に幕府14代将軍徳川家茂に嫁いだ孝明天皇の妹和宮が江戸に向かう際にお供を務めるなど、警備に関する仕事で功績をあげました。

文久２年（1862）、病によって42歳で死去し、幼年の康泰に松平家を託しました。

14　14代城主 松平周防守康泰（1862～1864）

文久２年（1862）の康圭の死去により、新しい城主となりました。

康泰は非常に病弱であったらしく、わずか２年の藩主生活で、元治元年（1864）に16歳という若さで亡くなってしまいます。

康泰が藩主の代に起こった事件が、天狗党の乱です（別項「三界万霊塔」参照）。隣国の常陸国から逃れてきた天狗党残党は棚倉周辺にも落ち延びており、藩は幕府の命令によって彼らを次々と捕えていきました。

15　15代城主 松平周防守康英（1864～1866）

病弱であった康泰に代わり、新しく棚倉城主となったのは松平康英です。

康英は非常な秀才で、若くして数々の業績を残しています。江戸幕府はこの頃、ペリーの黒船来航以来の外交問題を最重要課題として取り組んでいました。康英も棚倉城主を務める以前に、今の外務省にあたる外国奉行や開港して間もない横浜港周辺を管轄する神奈川奉行などを勤めました。また文久元年（1861）には、ヨーロッパ遣欧使節団の副使を務め、ロシアとの国境問題の交渉役に抜擢されています。

慶応元年（1865）には幕府最高職である老中を務め、翌年には業績を認められて領地を増やされ、武蔵国川越藩（埼玉県）へと移りました。

16　16代城主 阿部美作守正静（1866～1868）

4代にわたり棚倉を治めた松平家に代わり、隣の白河から移って来た阿部正静が慶応2年（1866）に新しい棚倉城主となりました。

阿部家は、関ヶ原の戦い以前より徳川家康に仕えてきた一族です。なお、阿部家は備後国福山藩（広島県）などを治めた別の系譜が本家にあたり、例えばペリー来航時に幕府のトップである老中筆頭として対策にあたった阿部正弘などを輩出しています。棚倉を治めた阿部家は分家にあたります。

新たな城主を迎えた棚倉藩でしたが、次第に日本全体を巻き込む戦乱の暗い影が忍び寄っていました。慶応4年（1868）、江戸幕府に対する不満を募らせた薩摩藩や長州藩などによる新政府軍と幕府軍との間に戦いの火蓋が切られると、棚倉藩は幕府軍側に味方し、東北や越州の諸藩から構成された奥羽越列藩同盟に参加、戦に備えました。しかし、陥落した白河城を拠点とした新政府軍は各地で幕府軍の戦いに勝利し、着々と棚倉へと迫っていました。

正静は棚倉の防備を万全にすべく、東北諸藩に援軍を求むべく各地を奔走します。しかし、彼が城を離れていた慶応4年6月、白河から出撃した新政府軍との戦闘により棚倉城下は壊滅し、244年間にわたる棚倉藩の歴史は終りを告げたのです。

棚倉ゆかりの人びと

1 坂上田村麻呂（758～811）

坂上田村麻呂は平安時代、東北の蝦夷征討に活躍した武人です。

坂上氏は、代々武門の家柄で天皇の信頼も厚い家柄であったとされ、田村麻呂も若くして武官となり、当時の中央政府である朝廷に出仕するようになります。

この頃、朝廷を悩ます大問題が蝦夷の反乱でした。陸奥国（現在の東北地方）では朝廷の支配を嫌う蝦夷が反乱を繰り返しており、いかにそれを鎮めるかが課題となっていたのです。

天応元年（781）、新しく即位した桓武天皇は反乱に対処すべく、大規模な征討軍を組織して東北へ向けて送り込んでいきました。しかし、蝦夷勢力の予想を上回る軍事力により戦いは長期化します。延暦10年（791）に副将軍の地位である征東副使の１人として従軍した田村麻呂は戦いにおいて功績をあげ、延暦16年（797）にはすべての軍事指揮権をもつ征夷大将軍として再び東北の地に進軍し、蝦夷反乱軍を鎮圧することに成功しました。その後も最高行政官として、東北地方の支配に尽力したとされています。

伝説によると田村麻呂は、馬場都々古別神社の創建に関わっているとされています。大同２年（807）、建鉾山（白河市表郷地区）に祀られていた神を現在の棚倉城跡に遷して社殿を造営したことが、馬場都々古別神社の由来について記されている『馬場都々古別神社縁起』にあります。

2 源義家（1039～1106）

源義家は平安時代後期の武将で、東北や関東における戦役で功績を挙げ、さらには多くの武士を従えるリーダー的存在として源氏発展の礎を築いたことで知られています。

源氏は平安時代後期、藤原氏といった貴族が政治を行う中で、平氏と並び武力にものを言わせて発展してきた一族であり、のちに鎌倉幕府を開く源頼朝などが知られています。

義家は康平５年（1062）、東北の豪族であった安倍氏との抗争である前九年の役に勝利し、その後朝廷から東北支配を任された長官職である陸奥守に就いた義

家は、出羽国を拠点に勢力を拡大していた清原氏の内紛に介入（後三年の役：1083～1087）するなど、東国における軍事的地位を築いていきました。武士たちの信頼も厚く、後世には文武両道の名将として語られています。

一説では、馬場都々古別神社の神宝である長覆輪太刀（別項参照）や赤糸威鎧残闕（別項参照）は、義家が東北の乱を平定した折にこの地を訪れて奉納したものであると伝えられています。

3 立花左近将監宗茂（1569～1642）

江戸幕府成立後、初めて棚倉藩を治めた藩主が立花宗茂です。

宗茂は、豊臣秀吉の九州攻めの際に手柄をたて、筑後国柳河藩（福岡県）の藩主となりました。その後も秀吉のもとで、相模国（神奈川県）の後北条氏を滅ぼした小田原攻めや朝鮮出兵でも活躍しましたが、関ヶ原の戦いで豊臣方に味方したため、徳川家康の処分によって領地や地位を失ってしまいます。しかし慶長９年（1604）に許されて幕府に奉仕し、２年後に棚倉の支配をまかされました。

宗茂は赤館城主として棚倉を治めました。しかし実際の住まいとしたのは大長屋と呼ばれる、現在の棚倉小学校の敷地にあった御殿だったと言われています。彼がどのような政治を行ったかを示すわずかな記録によれば、馬場・八槻両都々古別神社の朱印状取得に尽力したとあります。朱印状とは幕府が発行する公式文書のことで、このことは都々古別神社が藩からの税を取られない、私としての土地の所有を認められたことを示しています。

元和６年（1620）､それまで柳河藩主であった田中吉政が死去し、後継ぎがいなかったため再び宗茂が移ることとなり、実に約20年ぶりに柳河藩へ返り咲きました。

4 玉室宗珀（1572～1641）

玉室宗珀は、臨済宗大徳寺派の大本山である京都大徳寺の住職を務めた高名な僧です。

慶長12年（1607）、時の後水尾天皇の勅許によって大徳寺で最も高位の僧となった宗珀は、その証として紫衣という紫色の法服を贈られます。また翌年には、加賀藩（石川県）の歴代藩主である前田家の菩提寺である芳春院の創建に関わるなど、高僧として多くの尊敬を集めました。

しかし寛永６年（1629）、幕府は天皇による紫衣の勅許が幕府の許可を得ずに行われたことを問題とし、紫衣の無効を宣言しました。これに抗議した宗珀や同門の沢庵宗彭（沢庵漬けで有名な沢庵和尚）は幕府の怒りに触れ、それぞれ東北へ流罪となってしまいます。この一件を紫衣事件と言います。

宗珀が流された先は棚倉藩で、当時の棚倉城主内藤信照は、赤館城跡の南麓に自ら建立した光徳寺境内に庵を設け、手厚く彼を世話し親睦を深めたと伝えられています。棚倉での生活は、流罪を解かれて京都へと戻る寛永９年（1632）まで続きました。

かつて宗珀が住まいとした庵の跡地とされる場所には石碑が建てられ、つつましく暮らした彼の姿を偲ばせています。

5 小川芋銭（1868～1938）

小川芋銭は、明治～昭和期に活躍した日本画家です。茨城県牛久市で農業に勤しむ傍ら、近隣の風景や農民の生活といった身近な題材を好んで描き、また河童の絵を多く描いたことから「河童の芋銭」とも呼ばれています。

芋銭は、玉室宗珀（別項参照）の庵の跡地に建つ碑の碑文を手がけています。碑は、昭和５年（1930）に地元の俳人で農業教育者でもあった片山麟一らによって建立されたことが分かっていましたが、碑文の作者は長い間不明でした。しかし、平成22年（2010）に見つかった史料により、片山は親交の深かった芋銭に碑文の作成を依頼したことが分かりました。

碑は表に「玉室宗珀謫居之跡」として、かつてここに住んだ偉人を今もたたえています。

6 佐竹義重（1547～1612）

佐竹義重は戦国時代に活躍した武将で、彼の代に佐竹氏は棚倉を含めた南東北地域を支配しました。

佐竹氏は、常陸国久慈郡（茨城県常陸太田市ほか）を拠点にし、周辺の武士たちをまとめて次第に領地を拡大していった有力な一族でした。永禄５年（1562）に16歳の若さで佐竹氏を率いるリーダーとなった義重は、常陸国や下野国（栃木県）へと活発に支配権を拡大していき、次第に北関東を代表する戦国大名としての地位を確立していきます。のちに、南関東の後北条氏や東北の伊達政宗とも対抗しました。

元亀３年（1572）、義重率いる軍勢は当時棚倉を治めていた白河結城氏の一大拠点である赤館城を奪取すべく、攻撃を開始しました。佐竹氏の侵攻を食い止めたい白河結城氏は近隣の大名と連合して迎え撃ったために戦いは長期化しましたが、２年後の天正２年（1574）、ついに赤館城は落ち、更なる北への侵攻を目論む佐竹氏の拠点として機能することになります。

棚倉の地は佐竹氏の領地となりましたが、天正17年（1589）に勃発した伊達政宗と対峙した赤館戦争など、戦乱がなくなることはありませんでした。

7 佐竹義宣（1570～1633）

佐竹義重は天正14年（1586）、家督を子の義宣に譲ります。

義宣は当主になって早々、佐竹氏のライバルであった後北条氏を滅ぼす小田原攻めに参加した功により、翌年に時の天下人であった豊臣秀吉から常陸国や下野国の正式な支配権を認められました。天正19年（1591）には本拠であった太田城（茨城県常陸太田市）から水戸城（同水戸市）に移り、常陸国における支配をより盤石なものとします。

義宣の代にも、棚倉は引き続き佐竹氏の領地でした。棚倉における彼の事業は何といっても、文禄３年（1594）、秀吉の命によって馬場都々古別神社の本殿を建立したことです。

このように、常陸を中心として北関東に君臨した義宣でしたが、慶長５年（1600）の関ヶ原の戦いで豊臣方に味方したために領地を没収され、２年後に出羽国秋田

（秋田県）へと移りました。以後佐竹氏は、幕末を迎えるまで秋田を支配することになります。

8 松波勘十郎（?～1710）

松波勘十郎は、４代棚倉城主内藤弐信（別項参照）の時代に登用され、藩の苦しい財政の再建に取り組んだ人物です。棚倉藩のほかにも隣国の水戸藩（茨城県）や三次藩（岡山県）、郡山藩（奈良県）など、全国を股に掛けて活躍した改革のスペシャリストでした。

弐信が棚倉を治めていた時代は、度重なる飢饉や先代の信良の時代に起きた大火の復興によって藩の財政は火の車で、うまい対処法を打てずにいました。作改奉行という役職に就いた勘十郎は早速、現在の国勢調査ともいうべき、棚倉藩領内の土地や人びとの生活状況を事細かに書いた報告書を作成します。これにより、新しく開墾した田畑や耕作以外の内職、商人たちの経済活動など、これまでなかった対象に課税を行いました。また極度の倹約令を出し、村の祭りや人びとの祝いの行事にさえ干渉したほどでした。

こうした彼の行き過ぎた政策は、領内の人びとの大反発を買います。同じころ財政再建を手がけていた水戸藩では遂に一揆が起こり、勘十郎は捕えられて、当時最も残酷な鋸引きの刑によって処刑されてしまいました。勘十郎の手腕に期待した弐信でしたが、結局財政を立て直すことが叶わないまま、国替えによって棚倉を去ったのでした。

9 徳川光圀（1628～1700）

徳川光圀は、棚倉藩の隣国である常陸国水戸藩の２代目藩主で、時代劇ではお馴染みの水戸黄門様として親しまれています。

光圀は水戸藩において、当時先進的であった政策を次々と行いました。例えば、父である頼房死去の際に家来に対し、当時の風習であった後を追って死ぬことを禁止した殉死禁止令や、巨大な帆船快風丸を造って当時未開拓の地であった蝦夷地（北海道）の探検を行っています。中でも特筆されるのが、日本で初めての通史的歴史書である『大日本史』の編さん事業を手掛け、下野国（栃木県）の那須

国造碑の保護や上・下侍塚古墳の発掘調査を行うなど、いち早く古典研究や文化財の保存活動の先駆けとなったことです。

光圀は棚倉にも足跡を残しています。彼が書いた「常山文集拾遺」には、寛文13年（1673）に八溝山を訪れた際に作った詩が収められています。また、八槻都々古別神社に御簾を寄進したり、別当八槻家との間で贈答品のやりとりを記した書状が残っていたりと、交流があったことがうかがえます。

10 斎藤彦麿（1768～1854?）

斎藤彦麿は、江戸中期～後期に活躍した、日本の古典や古代史を研究する国学者として名を馳せた人物です。石見国浜田藩（島根県）藩主松平康任や、息子で12代棚倉城主となる康爵の２代に仕え、一説には国学の大成者である本居宣長のもとで学んだとも伝わっています。

彦麿は実に博識高い人物で、多くの優れた歌を残し、また貴族や武家の儀式作法である有職故実や古文を集めて紐とくなどといった研究を行っていました。こういった成果は『伊勢物語絵抄』や『源氏物語難語抄』といった古典研究に発揮され、実に20冊以上もの本を出しました。

彦麿の死没年については諸説ありますが、棚倉にて生涯を終えたと伝えられています。

11 十六ささげ隊

幕末の戊辰戦争において、棚倉藩では藩士や関係者合わせて58名が戦死したといわれています。その戦いぶりを物語るものに、十六ささげ隊の話が伝わっています。

十六ささげ隊は、藩士阿部内膳を総指揮とする16人の少数精鋭部隊でした。彼らは夜闇に乗じて敵を襲う戦法を得意としたため、「仙台烏に十六ささげなけりゃ官軍高枕（奥羽連合軍に十六ささげ隊がいなければ、新政府軍も安心して眠ることができ

るのに）」と揺われるほど恐れられていました。

この部隊の名前の由来は諸説あります。１つは、白河地方で古くから栽培されていた「十六ささげ」という豆の名前からとったといわれています。十六ささげは実が赤茶色、サヤが薄緑色で、これらの色がそれぞれ甲冑や旗印の色と同じだったようです。また、彼らが鎧兜に弓や槍をかまえ勇猛果敢に戦って「身を捧げる」ことから名付けられたという説もあります。

12 板垣退助（1837～1919）

板垣退助は、明治時代に活躍した土佐藩（高知県）出身の政治家です。日本初の政党である自由党を結成、そして民撰議院設立建白書を提出し国会開設を訴えた自由民権運動を掲げるなど、日本における数々の政治の礎を築いたことで知られています。

一方で若き日の退助は、幕末期に新政府軍の主要メンバーとして戊辰戦争に参加しました。土佐藩をまとめ上げて討幕運動を推し進めると、戊辰戦争では東山道先鋒総督付参謀という東国進軍の重役を担って次々と幕府軍を破りました。東北での戦いでは、慶応４年（1868）６月に白河を拠点とした新政府軍約800人を率いて棚倉城を攻めています。棚倉では１カ月間にわたり、新町地区の蓮家寺を陣として落城後にしばらく支配したと伝えられています。

13 西郷頼母（保科近悳）（1830～1903）

西郷頼母は、幕末期の会津藩主松平容保のもとで家臣の最高職である家老を務めた人物です。

会津藩は初代会津松平家の保科正之が、幕府３代将軍の徳川家光の弟である関係から将軍家との結びつきが古く、幕末の動乱期においても幕府方の要職をまかされます。文久２年（1862）、京都の治安維持にあたる京都守護職に容保が推されると、頼母は尊王攘夷派といった幕府に反抗する勢力の矢面に立たされる危険から必死に反対するなど、家臣の中で一貫して会津藩を守ろうと奮闘します。しかし彼の思いは実らず、結果として会津は朝敵として新政府軍の目の敵となり、戊辰戦争によって会津は灰燼に帰してしまいます。

明治維新後、頼母は保科近悳と改名し、東北や関東の神社の神職を歴任します。その１つが馬場都々古別神社で、明治８年（1875）から数年間にわたり宮司を務めました。在職中に近悳は、馬場都々古別神社の歴史や伝来する宝物をまとめた『縁起備考』という本を記しています。

14 稲垣千頴（1847～1913）

稲垣千頴は、幕末から明治期に活躍した国学者であり、卒業式でお馴染みの唱歌「蛍の光」の作詞者として知られています。

彼は、12代棚倉城主松平康爵が棚倉藩を治めていた弘化４年（1847）、家臣稲垣半太夫の次男として生まれました。教育熱心な松平家が城下に開いた学校青藍塾で学び、慶応２年（1866）に松平家の川越転封に伴い、藩校長善館の教師として赴任しました。その後も著名な国学者の平田篤胤が開いた気吹舎の塾頭を務めるなどメキメキと頭角を現し、明治16年（1883）には東京師範学校（現筑波大学）の教諭になっています。また、『和文読本』『本朝文範』といった、和文や国学の教科書編集にも尽力しました。

「蛍の光」の原曲は「オールド・ラング・ザイン」という、英米では年越しの際に歌われるスコットランド民謡です。維新後の西洋音楽教育の導入にあたり、当初から卒業式で歌われるものを目指して、千頴はそれにふさわしい歌詞を書き上げました。

千頴が作詞した「蛍の光」は明治16年（1883）に初めて演奏されて以後、日本の卒業式にとって欠かすことのできない唱歌として今に至っています。

15 阿部正功（1860～1925）

幕末の戊辰戦争に敗北した棚倉の人びとは、新しい明治の世になってから少しずつ復興を遂げていきます。その先頭に立って行政に尽力したのが阿部正功でした。

正功は、白河藩主阿部正耆の次男として生まれました。戊辰戦争で当時の棚倉

城主阿部正静（別項参照）は幕府方に味方したため、新政府は彼の義理の叔父にあたる、わずか９歳の正功に棚倉藩をまかせました。明治２年（1869）、それまで藩主が持っていた土地と人びとを朝廷のもとに返す版籍奉還が実施され、正功の位置付けは新政府の中の行政官である藩知事となりました。いわば、新政府の役人の１人として棚倉を担うことになったのです。

正功の棚倉における１番の業績は、藩校修道館の再興です。阿部家が白河藩主の時代に開き、棚倉に国替えの折に移転してきた学校で、正功自身もここで学問を学んだとされています。棚倉城下を中心に塙やいわきに５つの分校を擁し、廃校後も修道小学として受け継がれるなど教育の基礎を築きました。

明治４年（1871）の廃藩置県によって藩知事を辞職した正功は、その後も慶應義塾などで学問を続けました。特に人類学や考古学に造詣が深く、当時の学界で中心的な役割を果たした坪井正五郎や鳥居龍蔵といった学者とともに各地で調査を行っています。その１つが町内にある崖ノ上遺跡（別項参照）であり、棚倉における初めての遺跡発掘調査といえるでしょう。

16 折口信夫（1887～1953）

折口信夫は明治～昭和期に活躍した、民俗学者・歌人です。

信夫は大阪で生まれ育ち、國學院大學で国学を学んだのち、日本を代表する短歌雑誌『アララギ』や『日光』の同人として精力的に歌を発表しました。また、民俗学の研究でも知られ、柳田国男らとともに学界の確立に貢献しました。

信夫は、福島県立修明高校の前身である旧東白川農商高校の校歌の補作を担当しています。

17 田山花袋（1871～1930）

『蒲団』『田舎教師』などで知られる、明治～昭和期に活躍した小説家です。文壇において、人間の社会を客観的に描こうとする自然主義を確立したことで知

られ、のちに私小説というジャンルへと受け継がれていきます。

花袋がまだ貧しい文学書生だった明治23年（1890）、当時の棚倉や周辺地域行政のトップである東白川郡長を務めていた義兄から縁談をすすめられ、棚倉を訪れました。お相手は八槻都々古別神社の宮司の娘でしたが、先方の婿入試験に落第し、縁談は実らずに終わりました。

棚倉滞在中、花袋は棚倉の色々な所に足を運び、人びとと親交を深めたようで、その間に見聞きした名勝や旧跡を和歌に詠んだ『棚倉百勝詠歌集』という作品を残しています。また花園地区の長久寺や富岡地区の蔵光寺には花袋の詠んだ歌を記念した歌碑が建立されています。

18 勝田蕉琴（1879～1963）

勝田蕉琴は棚倉出身の日本画家です。

蕉琴が絵を志したのは、13～14歳の頃に会津出身の画家である野出蕉雨に絵の手ほどきを受けたことがきっかけでした。蕉琴の「蕉」の字は、師である蕉雨から１字をとったものです。その後明治32年（1899）に上京し、東京美術学校（現東京芸術大学）にて日本画を教えていた橋本雅邦に師事、狩野派の筆法といった伝統的な描き方から、当時生み出された線を明確に描かない朦朧体といった技法などを学び、画家としての技量を高めていきました。

美術学校を卒業した蕉琴が、次なる画業の地として選んだのはインドでした。折しも当時のインドを代表する詩人であり、アジア人として初めてノーベル文学賞を受賞したロビンドロナト・タゴールに歓待され、各地を巡って見聞を深めました。また、カルカッタの官立美術学校では日本画の講師として教壇にも立ち、同時にインド美術から影響を受けた作品を手掛けるようになりました。

帰国した蕉琴は、風景スケッチを繰り返し構図や画法を問い直すことで、さらに自身の絵画を確立させていきます。こうした厳しい修行の果てに出品した「林の中から」は、美術展にて高く評価され、以後文展や帝展といった栄えある展覧会の常連となり、

日本画家としての確固とした地位を確立していきました。大正15年（1926）には帝展の委員に就任し、のちに審査委員を務めました。

また、後進の指導にも熱心でした。故郷である福島県で活動する画家たちを集め、福陽美術会を結成して東京や福島県内で展覧会を行ったり、戦後は福島県総合美術展覧会（県展）の創設に奔走するなど、福島県における美術界の発展に尽力しました。

蕉琴の作品は、滑らかな色使いや絵の細部まで実にこと細やかに描かれることが特徴で、特に花鳥画など生き物を描くことを得意としました。出身地である棚倉でも、宇迦神社の絵馬や山本不動尊鐘楼の天井画などを手掛けており、作品を目にすることができます。

蕉琴は昭和38年（1963）、83歳の生涯を閉じました。馬場都々古別神社境内には「蕉琴先生筆塚」と刻された石碑が建ち、彼の偉業を偲ばせています。

19 聖護院道興（1430～1527）

聖護院道興は、八槻都々古別神社が属した本山派修験道の総本山である、京都の聖護院の住職を務めた室町時代の僧侶です。

室町時代以降、日本における修験道は聖護院率いる本山派と、京都の三宝院を総本山とする当山派の２大組織に分かれおり、互いに正当性を主張して対立していました。こうした中で、道興は自ら率いる本山派に属する寺院の視察や組織強化のため東国を巡る旅に出発します。その過程を記した『廻国雑記』（1486～87）によれば、白河へやってきた道興は八槻都々古別神社の宮司であり、同時に修験組織を束ねていた八槻別当のもとを訪ね、歌を詠んだことが分かります。この折に詠んだ「梓弓」の歌を記したものが、八槻都々古別神社に伝わる短冊であり、県指定重要文化財に指定されています。

20 高山彦九郎（1747～1793）

高山彦九郎は、江戸時代後期に活躍した思想家で、蒲生君平や林子平とともに、

「寛政の三奇人」と呼ばれました。奇人とは変人の意味ではなく、優れた人物という意味です。

彦九郎は上野国（群馬県）で生まれ育ち、若くして地元の学問所で陽明学などの思想や教えに触れ、また江戸や京都で学ぶ機会を得ると数々の思想家と出会い、次第に尊王思想に傾倒していったとされています。

折しもこの頃、30万人ともいわれる死者を出した天明の大飢饉や、近海に出没し始めた外国船への対応をめぐり、幕府に対する不満が各地で募っていました。こうした時代背景もあって、幕府に反感を持つ京都の公家や、のちの尊王攘夷運動の中心となる水戸（茨城県）の学者らとも交流するなど、全国的に活動する思想家として知られていきました。

しかし、反幕府ともとれる天皇家をトップに据えた考え方を推し進めようとする彦九郎は、江戸幕府から危険人物と見なされていきました。監視が強まっていくことを恐れた彦九郎は、寛政５年（1793）に筑後国（福岡県）で自ら命を断ち28年の遊歴生活を終えました。

全国各地を回った彦九郎は、棚倉の地も訪れたという記録が残っています。

21 有井諸九尼（1714～1781）

有井諸九尼は江戸時代中期に活躍した俳人です。

諸九尼は本名を永松とみといい、筑後国（福岡県）の村長の家に生まれ育ちました。彼女もまた別の村長に嫁ぎましたが夫婦仲は冷えていたらしく、やがて知り合った俳諧師の有井湖白とともに駆け落ちし故郷を去ったという波乱の経歴を持っています。２人は京都で九十九庵という小さな家を構え、多くの俳人と交流して俳句の腕を上げていったといいます。湖白の死後は出家して尼となり、日本全国を旅して数多くの俳句を詠みました。

諸九尼は松尾芭蕉の『奥の細道』の世界に憧れて、自身も東北を巡りました。その時の旅について記されているのが明和９年（1772）に書かれた紀行文『秋風の記』で、この行程には彼女が棚倉城下の宿で一晩を過ごした様子が描かれています。